今知りたい、頑張る生産者の情報フリーペーパー

2023
May

となりの農家さん

take
free

特集
スペシャルインタビュー
栃木県　上野いちご農園

いちご作り「名人」たる所以に迫る

上野いちご農園
上野 忠男

いちご作りの「名人」

いちごの生産量が50年以上日本一で「いちご王国」と謳っている栃木県。そこで「名誉農業士」に認定されており、県内外のいちご生産者から「名人」と一目置かれているのが栃木県南部にある上三川町（かみのかわまち）の上野忠男（80）だ。

上野が作るいちごはどの品種でも非常においしいと評判である。さらに、いちごの収穫シーズン中、他の生産者より1か月ほど早い11月初めから出荷できること、また一般的に収量が減少する3～4月も含めて毎月安定した収量を確保することができる。

また、いちご生産に重要な「苗作り」にも定評があり、上野が作る苗は県内の品評会で何年も連続して1位を取り続けた。

自分の苗は自分で作るのが基本と言われているにもかかわらず、今でも上野の苗を欲しがる生産者が後を絶たない。

そんな上野のもとには、県内外、さらには海外からもいちご作りを学びに来る人が多く、その一人一人に惜しげもなく技術を伝えている。

いちごへの飽くなき探求心

上野は1961年に就農した。当時、国の農業政策が多品目生産を推奨していたこともあり、上三川町で生産が盛んだった干瓢（かんぴょう）に加えて、水稲や養豚、麦など、多様な農畜産物の生産をしていた。

そのような中、1970年にいちご生産に着手した上野は、以降53年にわたっていちごを作り続け、現在は約7反を手掛けている。

当初はダナーという品種の安定生産に向けて日夜研究をしていた。その後、栃木県で女峰・とちおとめ等次々と新品種が開発されるたびに、県の農業普及

上野の苗作り

所とも密に連携し、率先して試作や本格生産を行って、栃木県のいちご生産を引っ張ってきた。

そういった取り組みが評価され、2001年には県の名誉農業士に認定された。その後も、名誉農業士の名に恥じぬよう、さらに自分に厳しくいちご生産を追求し続け、近年のスカイベリーやとちあいか等、新品種の開発にも貢献してきた。

上野がこだわって配合した土

こだわりの土作り

そんな上野がこだわりを持っているのは「土づくり」である。実は、上野の圃場がある上三川町近辺は黒ボク土が広がり、いちごの土耕栽培に向いているとは言い難い。そのような土壌でも理想のいちごを生産できるように、上野は土作り研究会等に積極的に出向き、先生から教えを請いながら研究し、もみ殻や米ぬか、堆肥などを配合したこだわりの土を作っている。

一般的にいちご栽培では13℃以上の地温に保つことが必要と言われている。**上野の土は微生物が活発に活動しやすいため、外気温がマイナス7.5℃となる厳冬期でも地温を18℃程度に保つことができ、真冬でも十分すぎる地温を確保することができる。**

そういった土ができて初めて、いちごが立派な根を張り巡らすことができ、元気ないちごを収穫できるようになるのだ。

植物への鉄供給

一般的にいちごは厳冬期の1～2月に根が張りにくく、そのため3～4月に花がつかず収量が落ちてしまう。

鉄は植物の成長に必須の栄養素であり、その働きの一つとして植物の発根を促進することは知られている。上野は古くからこの鉄の発根促進の働きに注目し、従来の土づくりに加えて厳冬期に鉄材を施用してきた。その結果、厳冬期でも**新しい根**が張り、3月以降にも安定して収穫することができた。

そのような中、2020年ごろ、それまで使っていた鉄材に替えて、鉄力あくあF10（以下、F10）という資材を使うようになった。きっかけは、上野のところに20年以上出入りをしている資材店「ハリウ」の針生からの勧めであった。

ハリウはいちご専門の資材店で、栃木県中のいちご農家に精通している。上野とは数十年来の付き合いであり信頼も厚い。針生は、**「F10は他の鉄材と効果は同等以上である。さらに高濃度の鉄分が含まれており、コストパフォーマンスに優れている。**そのため、お客さんに積極的に勧めている資材の一つである。」と自信を持って言う。

実際、上野はF10を試したところ、針生の言っていた通り、1～2月の根張りが非常によく、3～4月の収穫が安定した。それ以来、上野はF10を根張りに不可欠な鉄材として常用するようになった。

上野から信頼を置かれている資材店「ハリウ」の針生（左）

とりわけ2019年から生産を始めた栃木県の新品種「とちあいか」は、これまでの主力品種「とちおとめ」に比べて病気に強く、味も同等以上と評価を受けているが、苗作りの際にランナーの根が張りにくく活着しにくいという欠点があった。この苗づくりの際にF10を使うことで、「とちあいか」の欠点を補うことができ、より効率的に生産することができるようになった。

上野が愛用している鉄供給材「鉄力あくあF10」植物に二価鉄を供給できるため、鉄欠乏などの症状に効果的。

そういった取り組みもあり、現在では、とちおとめ、スカイベリー、とちあいかの3品種を土耕栽培で11月初旬から5月末まで中休みなく1反あたり10t前後収穫することができている。一般的に上手に栽培をする生産者でも1反あたり7tの収量ということを考えると上野はいかに多くの収穫をしているか分かるだろう。

毎年1年生の気持ち

上野が「いちご作り名人」と言われる所以は、土づくりや厳冬期の根張りなど、長年蓄積してきた技術やノウハウが詰まっているからであろう。

ただ、それ以上に重要なことは、上野のいちご生産に対する姿勢なのかもしれない。

今でも上野には忘れられない言葉がある。土づくりに試行錯誤していたころ、土づくり研究会の先生に言われた**「農業は1年に1作、20歳から70歳までやっても、50回しかできない。」**という言葉である。同じ作物を作っていても、気象条件など一度として同じ環境で生産することがない上、数十回しか生産することができない。

上野は80歳を過ぎた今でもこの言葉を胸に**「毎年1年生の気持ち」で真摯にいちご生産に向き合っている。**その気持ちがあるからこそ、周囲から「名人」と言われても新しい品種へのチャレンジやよりよい資材の追求をし続けているのであろう。

いちご生産の現役真っ只中の上野は、今後もいちご生産への探求が止まることはない。

上野が丹精込めて作った「とちあいか」

上野いちご農園プロフィー

栃木県上三川町にて50年以上いちご作りを行っています。名人と呼ばれ、2001年には栃木県から名誉農業士に認定。

上野のいちご作りはいちご関係の技術書籍にも多く紹介されています。

主な紹介例

- イチゴ大辞典（農文協編・出版、2016年1月）
- 最新農業技術　野菜vol・6（農文協編・出版、2013年11月）
- 現代農業2011年11月号（農文協編・出版、2011年10月）

鉄力あくあF10

植物は鉄分が不足すると、葉緑素を作れず、葉っぱの色が黄色くなり、光合成が十分に行えなくなります。それは土耕でも水耕でも同じです。

一般的な資材の多くは肥料成分や微量要素がバランスよく配合されており、その中に鉄分も含まれています。しかし、それらの鉄分のほとんどは植物がそのまま吸収できない「三価鉄」です。植物は「三価鉄」を「二価鉄」にして吸収しますが、環境ストレスや成り疲れで弱った時には「二価鉄」に変換できなくなります。

「鉄力あくあF10」は、植物がそのまま吸収できる「二価鉄」の資材なので、すぐに効果が期待できます。

植物の鉄分補給について詳しく知りたい方は下のQRコードまたは「鉄力」で検索。

鉄力HP　こちら⇩

鉄力あくあ®

あとがき

上野のいちご作りの技術が高いことは知っていても、何にこだわっているのか、どういった気持ちで生産しているのかまでは、なかなか耳にすることがなかったのではないかと思います。それぞれの農家さんが持つストーリーをご紹介することで「となりの農家さん」のことを少しでも知っていただき、少しでも農業生産のご参考になればと思っております。

となりの農家さん制作委員会
発行　愛知製鋼　0120-603-937